

末黒野

すくろの

5月号 (通巻861号)



春禽

海山のこゑ 浅春の鎌倉は
下萌や路地の奥より海ひかり
春禽の影を落としぬ友二句碑
椿落つ卵の丸みもつ石に
梅の空海の匂ひの引込線
港にて稚の頬突く風光り
ホテルの灯こぼるる港春めける
春禽や端正の樹を選び好み
獣道と思ひつつ行けり花すみれ
魚臭き町や昼より猫の恋
袈裟懸けの蔦の芽赤し喫茶店
フエリ―着く安房の菜の花先頭に

松本三千夫

野の鼓動

反り橋にはじまる宮の寒夕焼
飛石の千鳥足めき牡丹の芽
とどまれば耳朶に風春浅き
鳥啼くや山間しかと芽吹きをり
頭から歩く幼児木の芽径
土の香も風の匂ひも春はじめ
春めくや和服の似合ふ人とゐて
好天や寺の静寂に梅開く
近道をしてまぬがれず春の泥
時もたぬ波の寄せくる春の闇
野の鼓動つなぎ繋ぎて芽吹き山
人の名の出ぬもどかしさ山笑ふ

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

余寒

田中臥石

月蝕の宇宙の暗さ寒鼻
立春の九十九灘や海荒れて
地下鉄に迷ふ銀座の余寒かな
芭蕉庵近くを歩く春隣
石垣は城の跡形梅の花
お遍路の寺へ地球を百歩かな
薺摘みぬたり背越しの海の音
老農の鷹の目のごと畦を焼く
菩提寺を帰りしな踏む犬ふぐり
春の日の麴の匂ふ酒の蔵

皆既月食

森清堯

野水仙潮の香強き雨意の風
断下すごとと割り落とし寒卵
凍蝶のこつと展ぐる翅の艶
出航の銅鐸や寒気を震はせて
源泉の小さき水神梅早し
阿夫利嶺のほぐるる雲や春近き
赤胴の皆既月食三冬尽く
産土の闇を動かし鬼やらひ
老木の梅の一輪瑞気立ち
早春のひかりをはじき鳩の胸



浜どんど

森清信子

火の奥の火の仁王立ち浜どんど
吹き渡る北風のうなりや千枚田
白鳥の群発つ羽音湖の綺羅
風向きの海風となり干大根
寒晴やきしみて動く風見鶏
新聞を寝床にひろげ風邪の夫
デパートに買ふ駅弁や春隣
福豆を食し五臓の軽くなり
まんさくや硬さの残る谷戸の風
風光る栗鼠枝えだを擦り抜けて

春浅し

安齋久英

恵方道辿る潮の香身にまとひ
房総に片脚架くる冬の虹
波音を楽にそびらの山眠る
汀道続く限りや野水仙
葦枯れて沼は風音ばかりかな
春立つや懐紙に受くる黄身しぐれ
安房を背に白帆行き交ひ春浅し
山裾に張り付く家並春の雨
月食の始終見届け春を待つ
船舷に波迫り上ぐや春疾風

梅が香

石黒興平

予後の身をしばし委ぬる初湯かな
恙無く髭の伸びたり寝正月
あはあはとうすき影おき冬桜
眠りたる山やかすかに獣道
街の色セピアに変へて雪しきり
貨車来れば鉄の匂ひや寒波来る
詩心ふと冬満月の明るさに
梅が香や和装紳士のソフト帽
止り木にしたき三日月春めけり
ワルツともジャズとも雪解雫かな



乙 矢集

配列は音順(当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ)



寒の水 堺 昌子

寒の水ゆたかに伊豆の一の宮
近近と富士を小春の磯づたひ
消防車の試乗許さる出初式
雪三寸靴あとしるき朝の庭
窓あけて雪の結晶手に受くる
ぼたん雪夜の静寂をしんしんと
神苑の紅をきはむる寒ぼたん

冬 銀河 齊藤マキ子

冬銀河宇宙にも人働きて
海鳴やよろけ縞なす葱畑
遅れ来て厚きコートの置きどころ
子の一家住む雪国ののつぺ汁
観梅や卍の多き地凶広げ
鎌倉の谷戸に畑打つ音しづか
春炬燵祖母に教はる鶴亀算

冬 桜 吉田きみえ

冬洛暉港に数のつなぎ舟
菩提寺や三分咲きなる冬桜
枯蓮に風生れ沼は日を散らす
枯るるもの枯れ竹林の風きびし
一村の灯り春雪降りやまず
一雨に落ちて紅増す冬椿
岩つたふ水のしぶきや冬紅葉

春の色

今村千年

春近しパレットに足す萌黄色
日脚伸び机辺に探るパスポート
中七の思案の果や日向ぼこ
華やげる朝餉になりぬ寒紅梅
老いたれど矜恃ちぬ臥竜梅
花見小路にぼつくりの音春めきぬ
たうたうと流るる疏水春の色

雪後の天

岡田史女

獅子舞のむんずと掴むのし袋
寒行のこゑ二筋に別れけり
法堂の裏に消火器寒波来る
しのばせる懐炉南岸低気圧
雪積もる家ぬちに声閉ぢこめて
真四角に白布の乾き雪後の天
月蝕の一部始終や着ぶくれて

梅東風

岡野里子

この町に銀座ありけり小正月
梵鐘の春立つ朝の音色かな
層塔の宝鐸の風春きざす
春めける汀の男波女波かな
ひつそりと春ただよへり闇の庭
飛び石を渡る中洲や鳥の恋
梅東風や富士へ流るる雲一朵

受け口

小田嶋野笛

をのこらは皆母が好きおでん鍋
酔うてイ歌つて子や新年会
大臣賞受くる雪眼の恙兄
阿夫利嶺の雲より上は鷹の空
受け口は隔世遺伝寒の紅
空の何を茹らんと寒の二日月
ベンジンや晴着を仕舞ふ女正月

青炎集

松本三千夫選

大綱白里 亀卦川菊枝

山の辺の道の途切れて雪野原
脚のぼし野を駆けめぐれ雪うさぎ
寒の水指紋薄るる十の指
田の神の祠空つば春浅し
冴返る九十九里浜潮の音
書肆出づるや目交ひかすむ春の雪

横浜 正谷民夫

大綱白里 鈴木礼子

臘梅の綻ぶ空の深かりし
寒木瓜の真紅一輪慈しむ
枝の雪啄む朝の雀どち
風除けの垣に春告鳥の声
発着の成田空港風光る

花馬酔木左千夫生家の間の垣

横浜 森一枝

遠山のいづれも嶮し枯木立
蒼天へ極うす紅や寒ざくら
白鳥てふ華を水面に天守閣
芹の水わづかに増ゆる通院路
梅が香を勤行にのせ禅の寺
風待ちの凧揚げの子ら頬紅し

SP盤のうねり忙しや雪止まず
渋谷界隈まれびと溢れお正月
左義長の熾に突き出す団子竿
寒晴や畑仕事へいそいそと
太陽系の水の惑星薄氷
山茱萸や透かすガラスに黄の歪み

川崎 田中繁夫

凍鶴の肩寄せ立つや誰がとく
名の力士の福豆掴み福を撒き
リハビリの歩行躓く寒戻り
春立つや野鳥水浴ぶ手水鉢
下萌や治験薬社の株上がる
病む身にも潤み瞬く春の星

横 浜 柳 山 智 恵

久女忌や玻璃に寒禽弾む影

再びの噴火の報や冬深し

薄着なる異国女性や寒牡丹

毬のまま枯るるあぢさゐ屋の月

雪搔くや朝は道より動き出し

白梅や蕾に覗くうすみどり

横 浜 饗 庭 恵 子

大寒波石白のごと握りこみ

八重雲の杜を包むや追儼式

僧の袖風にふくらむ初不動

咳込める寝しなに飲みぬりんご酒

手で拭ふ玻璃戸のくもり冴返る

寒風や棘のごとくに頬を刺す

横 浜 布 施 由 岐 子

冬の夜や一千万の街明り

遠ざかる夜汽車の音や冬銀河

白波の寄する一湾虎落笛

砂浴ぶるやうに雀の枯葉浴ぶ

大寒や写経の文字の太き撥ね

朋有りて酌み交はず酒寒造

横 浜 高 木 邦 雄

野水仙百万本の靡く崎

寒晴や伊豆七島の影連ね

春めくや風をまとひて気儘旅

春の海飛天のごとき雲一朶

樹木医の仰ぐ上枝の芽吹きかな

久闊を叙して一献春の宵

横 浜 谷 貝 美 世

枝先の辛夷の冬芽青空へ

小流れの凍りつきたり宮の杜

大寒の日を散らしては宮の鳩

藁ぼつち食み出す二輪寒牡丹

雪の朝スキップの子ら饒舌に

スキー靴脱ぐや両脚無重力

横 浜 神 谷 さ う び

梅が香やわらべ地藏は首傾げ

寄り合ひて水子地藏の暖かし

輪藏の軋める音や春寒き

露座仏の胎内にある余寒かな

針納傾ぎ初めたる大豆腐

百態のかつばの絵筆塚うらら

耕 土 集

黒滝志麻子選



雪灯籠小さき揺らめき戸口まで

町田 中野千代子

日向ぼこドミノゲームは父の敗け

食い違ふ思ひ出話竜の玉

水族館水の色増し春めきぬ

剪定の動き迷はぬ大鉢

風花やポストをさがす旅の駅

デーケアへ父を見送る雪の朝

旧道は右に左に雪解川

鐘霞む鎌倉すでに旅の果

別荘の雨止む朝や童草

横濱 高橋 泰子

夫逝きし日の空白や古日記

横須賀 久保寺真佐子

ぴんと張る肌へ包丁冬大根

春永やおとな気もなく一首取り

七草粥との摘み菜眼裏に

寒九の水コーヒーの香に身を浸し

横濱 渡辺美智子

波音の孕む光や水仙花

一歳の始めの一步春隣

焼芋を割つて二つの湯気生まる

冬麗の駅舎の裏の足湯かな

ゲレンデをくるくる奔る幼かな

横濱 大塚かずよ

横濱 友田 悠子

熱爛や夫婦無口の差向ひ

水仙の一塊に日の優し

ゴッホ展の期待を胸に初電車

バレンタインデー二つだけ買ふ夢のチョコ

朝夕に愛でる幸せ庭の梅

日脚仲ぶ

小川 玉泉

(名誉顧問)

ラジオより相撲中継日脚仲ぶ
探梅を兼ね菩提寺へ歩を運ぶ
らふばいの枝をたづさへ吾子来る
雪溶かす金魚のをらぬ丸き池
道路鏡覆ひて夜半の雪はげし
登校の幼かたみに雪を投げ

雑記帳 10

隣国の韓国で開催されている冬季オリンピックの日本勢の活躍には目を見張るばかり。どの種目の選手も、日頃の厳しい鍛錬に耐えての成果を語っている。句作りの場合も同じ。